ポラリスを仰ぐ北の大地から

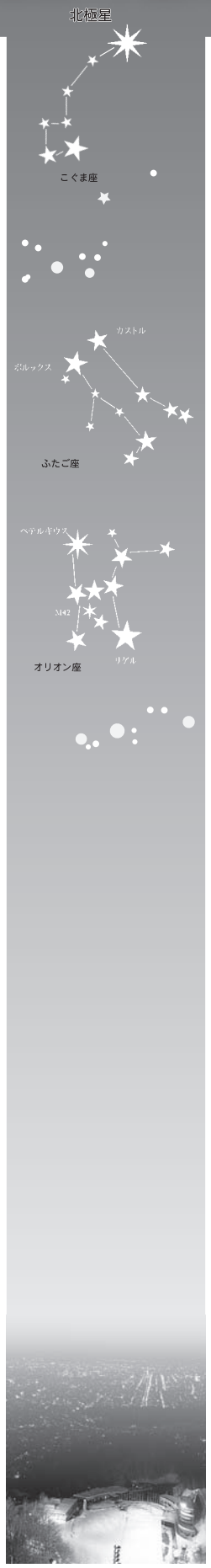
決して医師は過剰ではない

函館市医師会　会長　本間　哲

地域医療が崩壊すると言われて久しい。特に新医師臨床研修制度が始まった2004年以降、急速に大都市部の病院に研修医が集中し、地方の医局に若い医師がいなくなった。大学は医局を守るのが精一杯で、関連病院から医局へ医師の引き上げが起こった。

国は政策として都道府県に最低１校の医学部を配置してきた。その管轄区の医師養成に対応すると考えたのだろうが、北海道は約83,000㎢という圧倒的な広さを持ち、因みに２位の岩手県は約15,000㎢で1/5以下、九州と四国を合わせても到底及ばない広さである。これで本当に北海道の医師供給力が他県と同じレベルにあると言えるだろうか？道内の医学部は札幌と旭川にある。対人口10万人の医師数は大学所在市を含む二次医療圏ではそれぞれ264人、312人で、当然その地域に医師が集中している事が解る（全国平均219人、全道平均218人）。また人口は550万人、四国など４県で400万人、九州７県で1,300万人、医学部はそれぞれ４校、10校存在している。広い北海道の特殊性を考えると函館と釧路あたりに医学部を新設し医師供給力を全国並みにする事が必然ではないか。

日医は将来の人口減少や、歯科医師養成の失敗を挙げ、新設には頑なに反対してきた。医師総数を見ればそうかもしれないが、以前は内科医１人で循環器、消化器、呼吸器、内分泌の患者を診ていたのに、専門医制度の影響もあり４人の医師が要求される時代である。もっと医師養成を増やしても過剰になることはないと思う。正に地方の医師不足の現状がここにある。函館の基幹病院群が立ち行かなくなる危機が脳裏を霞める。そして政治が動けば仙台や成田に医学部ができることを目の当たりにすると、何とも理不尽でならない。



「北海道がんサミット2016」に参加して想ったこと

渡島医師会　会長　小笠原　実

今年４月に発足した**北海道がん対策「六位一体」協議会**主催の**北海道がんサミット2016**が７月24日に道新本社で初めて開催された。全国で２番目に高い北海道のがん死亡率を下げるために患者が望むがん対策を話し合うためで、私は「がんの予防や早期発見」のグループワークに参加した。

会場へ到着してみると中はすごい熱気に満ち溢れ、明るい表情をした参加者達でごった返し、座る場所を探すのに苦労するほどだった。後で分かったことだが京都や青森からの参加者もいて、約250名の人々で満席であった。

午前中は基調講演のあと、ピンクリボン・ディスカバ代表の柴田直美さん（乳がん患者）の力強い発表があってからランチョンセミナーとなった。

午後からはメインのグループワークが６テーマ、７班に分かれて行われ、私の班は北海道対がん協会の黒蕨（放射線技師）さんをファシリテータとした12名で対策型検診に重点をおいた討論をした。検診受診率が低いという課題に対し、検診費用の無料化、実施時期や時間帯の工夫のほかに、検診を受けるとポイントが貰えるなどのインセンティブがあり、さらに患者・家族会から体験談を聞かされることも検診を申し込む動機づけになるなどの発言があった。

各班で積極的な討論が行われたが、その時間が短く参加者同士でもっと話したかったし、医療者の参加がもっとあってもよかったし、学校・教育界からの参加があってもいいと感じた。また、二次医療圏ごとにがん対策を考える必要があるという北海道がんセンター院長の近藤啓史先生の主張にしたがえば、**地方版の「がんサミット」**が開催されてもいいと考えた。

さらに、胃がん検診に関しては、ピロリ菌が原因していることは明白なので**胃がんリスク（ＡＢＣ）検診**という科学的かつ効率的な検診がもっと普及してもいいと想った真夏の一日だった。